

成人用レジリエンス尺度の作成と属性による差異

○森本美奈子¹・厚村史美² (非会員)
 (¹ 梅花女子大学現代人間学部心理学科・² 株式会社 TBC)
 Key words: レジリエンス尺度・成人・性差および年齢差

目的

レジリエンスは、「困難な出来事に立ち向かい、乗り越え、そこから学び、それを変化させる能力」である (Grotberg, 2003)。しかし概念の広さゆえに捉え方は多様であり、過程、能力、結果のどの部分に焦点を当てるかは研究者によって異なり統一した見解はみられていない。また、幅広い年齢を対象とした尺度作成はあまりなされていないのが現状である。本研究の目的は、成人用レジリエンス尺度を作成し、基本属性によるレジリエンスの差を検討することである。

方法

調査時期および対象

2007 年 11 月～12 月に、O 県内の成人男女 268 名 (男性 130 名、女性 138 名) を対象に質問紙調査を行った。平均年齢は 36.91 歳 (SD=14.84 ; Range=20-69) であった。

調査内容

【基本属性】性別、年齢、未婚既婚、家族構成、人生が大きく変わるような経験の有無、幼少時可愛がられ経験の有無。

【レジリエンス】以下 3 つのレジリエンス尺度から成人におけるレジリエンス特性に当てはまると思われる項目を抜粋作成した新たな 45 項目について 5 件法で評定させた。(1) The Resilience Quotient の日本語版尺度 (長内・古川, 2004) (2) 小塩・中谷・金子・長峰 (2002) による精神的回復力尺度。(3) Wagnild & Young (1993) による Resilience scale。

【精神的健康】日本語版 GHQ28 項目版。

結果

成人用レジリエンス尺度の因子構造および妥当性・信頼性

尺度構成に妥当な項目選択のため Stepwise 因子分析 (最尤法・Promax 回転) を行った結果、21 項目 4 因子による解釈が適当と判断した ($\chi^2(132)=167.70$, GFI=.95, AGFI=.91, CFI=.97, RMSEA=.03, $p<.05$)。そこで因子数を 4 と設定し検証的因子分析を行った結果、各因子を「危機検討力」、「挑戦力」、「感情調整力」、「適当力」と命名した (Table 1)。

また基準関連妥当性として、レジリエンスと GHQ の関連を検討した結果適度な負の相関が示され、GHQ High risk 群では Low risk 群に比して有意にレジリエンス得点が低かった。レジリエンスの基本属性による差異

性差・年齢差ともに総得点では差異はみられなかったものの、性差においては、「挑戦力」は女性の方が、「適当力」は男性の方が高かった ($t(264)=-2.21$, $p<.05$; $t(264)=3.01$, $p<.01$)。また若年群 (20 代) と熟年群 (30 代以上) を比較したところ、「挑戦力」は若年群が、「感情統制力」は熟年群が高かった ($t(264)=-3.00$, $p<.01$; $t(218)=6.07$, $p<.001$)。

次にレジリエンスの下位因子・総得点において、年齢と性別 2 要因の分散分析を行った。その結果、「挑戦力」と「感情統制力」では年齢の主効果が、「適当力」では性別の主効果と、年齢・性別の交互作用が見られた (順に $F(1,262)=6.58$, $p<.05$; $F(1,262)=37.86$, $p<.001$; $F(1,262)=9.20$, $p<.01$; $F(1,262)=4.82$, $p<.05$)。「適当力」について単純主効果の検定を行った結果、若年女性より熟年女性が高く、若年群では女性より男性が高かった ($F(1,262)=6.09$, $p<.01$; $F(1,262)=11.81$, $p<.001$)。

Table 1 レジリエンス尺度の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転後) と平均値・標準偏差

項目	I	II	III	IV	共通性
I 危機検討力 (M=3.10, SD=.98, $\alpha=.85$)					
私は様々な角度から状況を見ることが出来る	.73	.03	-.30	.04	.44
自分が何を考え、それがどんな風に自分の気持ちに影響するか、よく理解している	.73	.08	-.13	-.09	.41
困難な状況にある時でも、たいていその打開策を見つけられる	.72	.04	-.04	.06	.19
たいていの場合、問題の本質の原因を突き止めることができる	.70	-.13	.05	.05	.39
問題が生じると、解決策を試みる前にまず、何が原因かじっくり考える	.63	.08	-.09	-.12	.26
私は自分なりの規律をもっている	.60	.03	.01	-.04	.34
たとえ本当でなくても、困難な状況は自分でコントロールできると信じるほうが良い	.46	-.01	-.08	.13	.47
私は以前にも困難を経験してきているので、大変なことがあっても乗り切ることができると思う	.43	.28	.07	.07	.37
II 挑戦力 (M=3.19, SD=1.06, $\alpha=.82$)					
自分には将来の目標がある	-.10	.86	-.09	-.01	.39
自分の将来に希望をもっている	-.10	.81	-.01	.13	.53
自分の目標のために努力している	-.01	.69	.16	-.11	.54
いっしょうけんめいがんばれば、必ず報われる	.10	.52	-.07	.06	.62
チャレンジとは自分を高めたり、何かを学んだりすることだ	.13	.44	.02	-.06	.26
新しいことにチャレンジするのが好きだ	.24	.44	.03	.01	.35
III 感情統制力 (逆転) (M=3.39, SD=1.04, $\alpha=.65$)					
感情に流されやすい	-.30	.03	.64	.05	.56
その日の気分によって行動が左右されやすい	-.10	.00	.62	-.06	.40
ものがとがうまくいかないと、すぐにあきらめなくなる	.15	.03	.57	-.16	.63
仕事でも家庭でもそうだが、自分の問題解決能力に不安がある	.20	-.08	.48	.20	.34
IV 適当力 (M=2.57, SD=1.05, $\alpha=.58$)					
自分の手に負えないことについて、時間をかけて考えない	-.11	.03	-.22	.73	.56
私はよくよく悩むことはめったにない	.15	-.02	.16	.48	.50
集中の妨げになるようなものを考えないようにできる	.16	.06	.18	.35	.36
寄与率 (%)	25.96	6.74	5.02	4.65	
累積寄与率 (%)	25.96	32.69	37.72	42.37	
因子間相関	-.59	-			
	.36	.16	-		
	.24	.22	.11	-	

配偶者の有無では「感情統制力」と「適当力」と総得点に有意な差がみられた。また人生観が変わるような経験、幼少時可愛がられ経験の有無別では、ともに「危機検討力」と「挑戦力」において有り群が無し群より高かった (順に $t(249)=2.23$, $p<.05$; $t(253)=2.56$, $p<.05$; $t(260)=3.09$, $p<.01$; $t(264)=3.63$, $p<.001$; $t(256)=3.46$, $p<.01$)。

考察

今回新たに作成した成人用レジリエンス尺度は十分な信頼性を有しており、また精神的健康の悪さとレジリエンスの低さが関連し、先行研究における構成概念を反映していたことから、妥当性が示されたといえる。

属性差に関しては、「挑戦力」においては女性の方が高く、「適当力」においては若年では男性が女性より高かったが、熟年では性差がみられなかった。このことから、配偶者の有無など他の結果を考慮すれば、結婚などのライフイベントが女性の「適当力」を高めている可能性が考えられる。また年齢差については、レジリエンス全体における差異はみられなかったものの、レジリエンス要素に占める重要性が年齢と共に「挑戦力」から「感情統制力」へと移行していく傾向が観測された。また「危機検討力」についても経験の影響が大きく、レジリエンスは常に変容しうる特性として更なる検討が必要であると考えられる。

引用文献

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究, 35(1), 57-65.
 長内綾・古川真人 2004 レジリエンスと日常的ネガティブライフイベントとの関連 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 7, 28-38.
 Wagnild, G. M., & Young, H. M. 1993 Development and psychometric evaluation of the resilience scale. *Journal of Nursing Measurement*, 1, 165-178.

(Morimoto Minako, Atsumura Hitomi)